

読書習慣の確立をめざして

—「読んでいい会」による読み語り活動—

プロフィール

地域

広大な北海道の中心都市・札幌は、人口189万人、全国5番目の都市。夏は爽やか、冬は積雪寒冷。緑豊かな街でありながら、札幌駅周辺の高層ビルが間近に見える地域である。

学校

北光小学校は大正13年1月開校。児童数387名、学級数12学級、教職員数21名。開校85周年を迎え「ゆたかにみのる 北光の子」を目標に教育活動を進めている。

PTA

会員数321名。学級減に伴い、役員を中心に学年学級委員会と4つの専門委員会に組織を改変し活動を進めている。4つの成人学級と2つのサークルが熱心に活動している。

1 はじめに

電子メディアが氾濫し、子どもたちへの影響が危惧されるなか、今、子どもたちの心を育むものとして絵本が注目され、読み聞かせ活動が活発化している。

本PTAでも絵本好きの親たちが、平成十六年、学校とPTAの後押しを受け、成人活動の一つとして「読み語りの会」を立ち上げた。聞かせるだけではなく共に楽しむ気持ちを大切にしていきたいとの強い思いからその活動を「読み語り」と位置づけ、会の名称を児童に公募し、「読んでいい会」として活動をスタートした。

絵本の読み語りを通して子どもたちに本の楽しさを伝え、それを共有していくことを主な目的とし、子どもたちが読書に親しみ、その静かな時間の中から心豊かに生きる術を見いだしてくれることを願い活動している。

北光小学校PTAは、平成十九年度、札幌市東区PTA連合会及び札幌市PTA協議会からそれぞれ優良PTAとして表彰を受けた。それを導いた「読んでいい会」の地道な活動を紹介したい。

2 活動内容

①週一回、中休み（十時三十五分〜十時五十五分）の読み語り

毎週火曜日の中休み、図書室に隣接する視聴覚室を使い、会のメンバーが毎回二名ずつ交替で、選書会議で選ん



サンタクロース変装の校長先生が、子どもたちにプレゼント

だ絵本二冊ほどを読む。他のメンバーも都合がつく限り参加し、準備や後片付け、校内放送を入れるなどし、終了後は必ず反省会を行う。

この時集まるのは低学年を中心に二十〜三十名の子どもたちだが、毎月一回行われる「おたのしみ」の時には、その倍以上の子どもたちが集まり、大型絵本・紙芝居・ペープサートなどを楽しむ。また、季節の行事を積極的に取り入れ、こどもの日・お月見・クリスマス・節分・雛まつりなどには飾り付けを施し、集まった子どもたちにしおり・めんこ・折り紙で作ったツリーや雛人形など手作りのプレゼントをすることもある。時には先生方に紙芝居の協力をお願いしたり、校長先生にサンタクロースに変装していた

だいたりもしている。また、高学年向けに「こわいもの特集」のプログラムを組むなど、子どもたちの興味を引くよう活動に変化をつけている。



読書チャレンジの読み語り（1年生の教室）

②読書チャレンジ時の各教室での読み語り
本校では年二回の読書週間に、朝のチャレンジタイム（月・水・金曜日の八時四十五分〜九時）を利用し、札幌市の寄託図書を使って学年ごとに同じ本を読む「集団読書」と、「読んでいい会」による「読み語り」という二つの取組を行っている。

「読み語り」では、会のメンバーが二〜三名ずつ担当の学年を決め、一〜六年生の各教室で絵本を読む。これは授業の一環でもあるので、担当者は担任の先生方と綿密に打ち合わせを行う。名作や昔話、授業に関連のある戦争・環境・アイヌ民族などをテーマにした本の希望が出されることもあり、それらを取り入れつつ、他の学年とのバランス

なども考慮して各学年に合った絵本を慎重に選書する。高学年では、同じ作者の作品や同じテーマの本を紹介するなどして子どもたちが興味を抱くように工夫している。

十五分という短い時間の中で読めるのは一〜三冊ではあるが、この読書チャレンジだけでも年間のべ九〇〜一〇〇冊の

本を読んでいることになる。

③PTA主催「北光ふれあいフェスタ」での出店

毎年、秋に行われるPTA行事「北光ふれあいフェスタ」では、視聴覚室に舞台を設け、手作りの人形を使っただ人形劇をメインに、ボードビルやペープサート、劇、ミュージックパネルなどの他、マジックや南京玉すだれなど多彩な演目で、約一時間半にわたり、のべ三〇〇人におよぶ子どもたちや地域の人たちを楽しませている。また、来てくれた子どもたちには手作りの品をプレゼントしている。

④児童図書委員会による図書貸し出しへの支援

少子化の影響で、平成二十年度より学級数・職員数ともに減少し、そのことがさらに図書貸し出し日の減少へと波及した。前年度までは毎日、中休みと昼休みに行われていた図書貸し出しが、週二回、中休みのみとなった。広い図書室は暗く閉ざされることが多くなり、貸し出し日には子どもたちの長い列ができ、借りるのを諦める子さえ出てきて、会としても憂慮していた。

貸し出しを行うのは図書委員会の子どもたちだが、コンピュータのトラブルに備えて大人がついている必要がある。学校からの依頼を受け、二学期から週一回（火曜日）のみではあるが、会のメンバーが二名ずつ交替で図書貸し出しを手伝うこととなった。このことにより、混雑は幾分解消され、貸し出しがスムーズに進んでいくようになった。

3 活動上の工夫

現在、会のメンバーは十三名。仕事をもっていたり、幼い子がいたりする中で、「できる人が、できる時に、できることを」することで負担が偏らないよう、また無理せず楽しみながら活動できるようにと心がけている。

それぞれが予定を立てやすいよう毎月第三火曜日に例会を設定し、なるべく全員が参加する中で活動予定などを決め、活動を盛り上げていけるようにしている。

また、年に四〜五回選書会議を行い、中休みに読む本や当番を決める。この選書会議では、メンバーが選んで持ち寄った本や子どもたちから寄せられたリクエスト本の中から、内容や絵が重ならないように、また季節なども考慮しながらより良いものを伝えられるよう努力している。

中休みの読みの後に反省会を行うことで、メンバーの技術の向上やプログラムの工夫を行ってはいるが、さらに技量を高めるため勉強会（時には外部から講師を招くこともある）を行うほか、個人的に外部の講演会や勉強会に参加しているメンバーも多い。

4 活動の成果と今後の課題

六年前、この学校の図書室は暗く活気がなかった。それが徐々に蔵書も増え、話題の本が棚に並ぶようになり、本校出身の地域の方から寄贈された真新しい多くの本が図書室に彩を添えている（田中文庫）。平成十九年度には、ふ



中休みの図書室
用務員さん手作りの木製ベンチで、読書する子どもたち

れあいフェスタの収益金の一部でPTAが買った材料を使い、用務員さんが手作りしてくれた木製のベンチが置かれた。図書室は子どもたちにとって明るく過ごしやすい空間となり、図書の貸し出し数も年々増加していた。そのような中で、図書貸し出し日が減少したことは、大変残念なことであ

る。
しかし、読書チャレンジの「集団読書」では、十五分間、学校中がシーンと静まり返るほど子どもたちは本に集中している。また、「読み語り」を楽しみにしている子どもたちや先生も多く、目をキラキラと輝かせながら絵をみため、耳からの読書を楽しんでいる姿は活動の励みとなる。子どもたちから会に寄せられるリクエストの数は増加傾向にあり、その内容からも幅広く絵本に親しんでいる様子を知ることができ、この活動は着実に定着してきていると思われる。

また、今年度、札幌市東区PTA連合会主催の親子ふれあい事業で人形劇を披露する機会に恵まれ、地域や他校と

のつながりもでき、初めての校外での活動は会にとっても良い経験となった。

この活動もまもなく五年目を終えようとしている。周囲の理解と協力により、子どもたちの本に対する興味や関心を高めるに至ったが、さらに生活の中に読書を習慣として位置づけていくためには、この活動を長く続けていくことが必要である。そのためにも、会のメンバーを増やしていくことが大きな課題となる。また、近隣で同じような活動をしている他校との交流や情報交換を行うことで活動を一層充実させ、より多くの子どもたちに読書の楽しさを伝え、豊かな時間を分かち合っていけるよう努力していきたい。

展望

子どもに公募して命名した「読んでいい会」の読書に関する地道な実践である。テレビやインターネットの普及した時代であるからこそ、絵本の読み聞かせは、子どもたちが読書に親しみ、心を育む上で貴重な役割を担っている。「読み語り」を中心に学校と協力し合い無理せず楽しみながら活動している。読書好きの親たちによる目立たぬ実践ではあるが、学校との連携を図りながら教育活動として確かな成果をあげた適切な事例である。